

別添資料 2

外部評価委員会を受けて

1. プロジェクト全体に関する改善点

1-1. 全学的に波及するプロジェクトであることの明確化(上杉委員)

全学的なグローバル化にたどりつくんだという事をもっとはっきり示していただきたい。

調査研究に関する説明のなかでも全学部への波及を目指すというお話になっている。そういった点をもっと強調して明確に示していただきたいというふうに思います。

【本学からの返答】

構想調書にある、本事業をモデルとして、全学部へと波及させていくという取組の図(図1-1)を、今後の実施報告書にも盛り込みます。

本事業では、構想調書の枠組みを超えて、既に全学的に取り組んでいる施策(英語学習システム eLearning の導入、ラーニングコモンズ等)も多数ありますので、そのような成果については、先行して全学的に取り組んでいることを、次年度からは、よりはっきりと打ち出していきます。

1-2. 教育プログラムのみでなく教学体制の整備に取り組んでいる(川島委員)

数年前から、特に藤岡学長が就任されてから、全体的な教学改革に非常に取り組まれて。それから数年だと思うんですけど、よくぞここまで、というふうに、変われば変わるもんだなあということを、本当にそういう好事例ではないかなという風に思いました。

特に、どうしても評価してしまうのですが、先ほどもお話でいましたように、こういう教育プログラムによってこういう学生を育てますということだけではなくて、大学のみなさんの教学体制を含めたカリキュラム構築であつたりとか、学部間の様々な連携であつたりとか、IR の問題だつたりとか、そういう非常に構造的なところに目をつけられて、教職協働でしかるべき、対応をされている。実際プログラムはまだ始まっていないんですけど。そういう点は評価してしかるべきなのではないか。

【本学からの返答】

そのように評価して頂き、誠に嬉しく存じます。大学の中で少しずつでも変化し続けるということは、強く求められる一方、学内調整はどの大学でも大変苦勞していることと思います。そのような中、変化することができた部分について、外部の専門家の先生からポジティブな評価を頂けると、今後の学内調整をよりスムーズに行うための追い風となります。頂きましたお言葉を糧に、現状に満足する事なく、引き続き教学体制の整備に取り組んで参る所存です。

1-3. 本事業の実施体制について(穂屋下委員)

今日は、非常に事務体制がしっかりしていて、非常に羨ましいなと思ってお聞きしておりました。

【本学からの返答】

そのように評価して頂き、大変嬉しく存じます。本事業の実施体制は、大変多くの部署との連携が必要となるため、多くの部署が協力し合って、タスクを分け合って実施しています。グローバル化推

進プロジェクトチーム(親 PT)では、下部プロジェクトチーム(子 PT)が集い、互いの進捗状況をしながら進めています。今後は、更に各プロジェクトチームのタスクを連携して進める必要があると考えております。また、事務職員も大学構成員の一員として、各プロジェクトチーム会議で管理者を担ったり、企画を作ったりと教員と共に事業を積極的に進めており、このような、多くの部局の横断を伴い、教職が協働する進め方には難しさもありますが、委員の方のお言葉を励みに、一層の努力をして参る所存です。上杉委員のおっしゃるように、教員、職員、専門職員は、それぞれ異なる経験や知識、スキルがありますので、互いの短所を補い合い、長所を最大限活かせるような柔軟なプロジェクト運営に今後も全員で努めたいと思います。

1-4. 本事業の構想について(松本委員)

これまでの高等教育の流れの中で、まあこういう感じで通すだろうと、正直言えば思いました。ただそれでは多くの人たちの共感を得るのは難しいだろう。同じように学生の育成に悩んでいる、それから自分はこれからどうしたらいいんだろうと悩んでいる若い人たち、それから自分の子供たちはどうしたらいいんだろうという親たちや自分の生徒たちを預けようと思っている先生方がこれを読んだときに、説得されるんだろうか、納得するんだろうかと思ったときに、やっぱり疑問符が消えない。

分析しないままに数値目標掲げたら、これはつなぐのは相当しんどいぞという気がしました。

学生ときちんと向き合わないままにプロジェクトだけが進んでいくという、そんな感じを受けました。

私は大学というのは、学生に変化と成長の機会を提供できる、自由な場だというふうに思っています。無限の可能性を持っている場だと思います。だけれど、文科省のスローガンに躍らされて、とんでもない事業にならなければいいなと(後略)。

【本学からの返答】

上滑りはよくない、綺麗ごとよくない。しかし前のめりは、本学としては、全然 OK だと考えています。前のめりに教育プログラムを開発し、若い人達に自身に眠るやる気を思い出してもらえる、そのような熱意ある教育を実施する、そのような大学でありたいと考えております。

本学は不本意入学の学生が一定数居ます。そのような学生でも、やる気があれば、前を向いて、胸を張って卒業できる。そのようにするのが、本学の一つの役割と考えています。そのような教育プログラムの一つで、例えば、本事業に関係するものと、理系英語のセミナーがあります。三学部、理系の三学部から学生が集い、英語でコミュニケーションしようと、英語でそれぞれの専門を発表しあう、彼らが自分たちが専門で学んでいることを何とか英語で伝えたい、とそういう意欲をひしひしと感じることができたプログラムになりました。

インターンシップの履修率のご指摘については、外部評価委員会のプレゼン内でもご説明致しましたが、とにかく理系は専門科目の教育がおろそかになっては本末転倒となります。しかし、理系の専門科目は、非常にカリキュラムの密度が濃く、なかなかカリキュラム上、実習系のプログラムを、入

れ込む隙がありませんでした。これまでの履修規定を見直し、実習系のキャリア科目等を取れるように本事業では学部でルールを整備し、平成 26 年度からの学生受入れに備えることができました。

今後は、コース学生の履修率や、履修率の裏側にある事情についてを、より一層詳しくご報告できたらと考えております。

2. グローバル・サイエンス・コースに関する改善点

2-1. コースの DP と学部の DP との関係性の整理(川島委員)

3つのポリシー自体がもっている構造的な問題も若干あると思うんですけども、あとその学位を取得した人間に対する、その学位上の方針ですので、それがですね、ふつうの理学部のDPとグローバル・サイエンス・コースを修めた理学部の人間のDPとが、どういうふうに構造的になっていると
いうことが、わかりやすければ、もっとよかったなというふうに思いますが。

【本学からの返答】

報告書の記述が不十分で、混乱を招き、大変申し訳ありません。グローバル・サイエンス・コースでは、学部の DP にプラスαの形でグローバル・サイエンス・コースの DP を記述しており、接続を意識したものとなっています。報告書では、通常の学部の DP について触れずに執筆したため、関係性が見えない状況となってしまいました。ホームページ上または次年度の報告書にて、関係性の分かる資料を追加したく存じます。ご指摘有り難うございます。

2-2. コース学生の学習成果の測定に関する取組(川島委員)

ルーブリックなり、あるいはGPAなんかで、その測定について考えられているのか、それともeポートフォリオで、もう少し質的に見ていこうとされているのかというのは、もうちょっと教えていただければありがたいかなあというふうに思いました。

【本学からの返答】

学習成果の測定について、その主要な部分をルーブリックに基づくeポートフォリオ上の学生・教員間のやりとりという、質的なデータと、コース学生向けの質問紙調査(量的・質的)に基づいて実施しようと考えています。

コース学生向けのルーブリックは、GSC の DP に結びつけ、海外事例を参考に開発致しました。このルーブリックは、コース学生の使用するeポートフォリオ上に掲載しております。コース学生が自身の学びを、GSC で身に付けるべき能力と結びつけながら、ルーブリックを参照し、段階的に振り返り、評価することが可能となっています。

2-3. コース学生の学習成果の測定に関する取組(穂屋下委員)

基本的にあまり卒業生の質がどうなるっていうことはあんまりよく書かれていないなあと思った。

基本的に(どこの大学も)学生がどうなったかということに関してはわかりません、先々ですといううなことを利用して全部文科省には報告しているんですけど。でもやっぱりこういう取り組みをするのであれば、そこは避けられないと思うんですね。それがうまくいき始めて、初めていい例になるとおもうんで。今後もうちょっと頑張っていたきたいなと、数値で出していきたい。

さっきありましたすよね、何人留学するとか、TOEICで何点取るとか、ああいうのは、もうちょっときちんとお出しになってもいいのかな。

平成 26 年度からがスタートということで、あまり触れていないんだというのはちょっとわかりました。

【本学からの返答】

前述の川島委員からのご指摘でもお答えしたことなのですが、ルーブリックに基づく e ポートフォリオ上に、コース学生の学習履歴が蓄積されます。このデータと、コース学生向けの質問紙調査、TOEIC スコア等の量的データ、に基づいて教育評価を行う予定です。穂屋下委員のおっしゃるように、本事業の学生は、平成 26 年度後期からコース配属となりますので、平成 26 年度から、データを取りながら事業を実施します。教育は、もともと成果が目に見えにくく、長期的に見て初めて価値が分かることもあり、大変困難な課題ではありますが、可能な限り、教育評価を大学外の方、広く社会の方に分かりやすく、納得できる形で示していく必要があるだろうと、深刻に捉えております。

2-4. コース学生の範囲の明確化(穂屋下委員)

要するに学部は全員がこの対象なのかなという受け取り方でもいいのかなとちょっと思ったものですね。その辺がですね、報告書の中であんまりよくわからなかったですね。というのは、特別プログラムの人は確かに 600 点が目標かもしれないんですけども、英語の TOEIC にして一般の学生も多分 450 とかそのあたりの得点を持っているのではないかと思ったんで、それに対してもやっぱりあの、ある程度報告されたほうがいいのかという気がしました。

【本学からの返答】

分かりにくい報告書となり、大変恐縮しております。本事業で開発したコース学生は、対象 4 学部の内、10%程度にあたります。ただし、希望者・適性者の数により多少変動します。

一度に学部内全学生に手厚く指導する事は不可能ですので、まずは 10%程度の「やる気エリート」とでも言うべき、モチベーションの上位層をコースに受入れ、育成しています。その「やる気エリート」達が、他の学生にも「一緒にやろうよ」と声を掛け、学部学生全体に良い効果を齎すことを期待しています。

ただし、文部科学省に提出する数値目標とその達成度については、対象学部生全体がその範囲となりますので、学部全体のデータを提出しています。

混乱を招き、大変申し訳ありませんでした。次回からは、論じ方を工夫したい思います。

3. グローバル・サイエンス・コースに係る入学制度に関する改善点

3-1. 入学時の学生の動機付けについて(川島委員)

入学時において必ずしも高いモチベーションを持っているとは限らない。そういう学生に対して、一体どういうふうな動機づけについて、リアルチェックみたいなものも含めて、与えたらいいのかというのかということは、今後の課題なのかなと。今、初年次教育ですごく注目されているのはそこですので、そういうところで、他に参考になるような事例みたいなのがあれば、それは参考にされたいのかなと。

【本学からの返答】

初年次の大学適応やコース適応について、他大学での先進事例等を参考に、今後も継続して取り組みたいと考えています。現在、コース配属や入学時に行っている本学の施策について、一部は報告書の内容と重複致しますが、下記に列挙させていただきます(本学の入学時の取組を網羅する物ではなく、あくまでも一部となります。)。このような観点からのまとめが報告書に載っておらず、情報が見にくかったと反省しております。この点について、網羅性を高めた物を、次年度報告書では掲載したく存じます。

1	サマーキャンプ	【コース適応・動機付け】グローバル・サイエンス・コースに配属学生が決まってすぐに実施される合宿授業。グローバル・サイエンス・コース及びイングリッシュキャリア専攻の学生が参加し、学生達は合宿中、英語のみ使用して日常生活・理系英語プログラム(ディスカッション、プレゼンテーション)に取り組む。
2	GSC+ jeeすしーぷらす GSC 朝活・昼活	【コース適応・動機付け】グローバル・サイエンス・コース学生が、週に一度有志で集まる取組。コーディネータ役を GSC の担当専門職員(教育専門教員)が担当し、学生達が抱える理系英語や留学に関する悩みについて取り上げ、ディスカッションしている。
	グローバル・サルーン	【コース適応・動機付け】グローバル・サイエンス・コースの学生及びイングリッシュキャリア専攻の学生、及び関係教職員が集まり、英語のみで軽食を取りながらディスカッションしている。
	GSC の取組もう少し書き足す	
3	自己発見と大学生活	【大学適応・動機付け】初年次キャリア科目であり、1年次学生の半数～2/3が履修している。学部横断の学内ネットワーク作りの促進や、自己肯定感を高めるため、初対面者とのグループワークを中心とした

		教育プログラムを実施している。
	入学時オリエンテーション/入学生向け DVD	【大学適応・動機付け】各部署の大学適応の施策についての連携を行い、入学生に一斉にアナウンスしている。また、大学生活への期待感を具体的にするため、学生に DVD を配布し、これを見てからオリエンテーションに参加するように徹底して周知している。
	学部横断の修学支援	【大学適応】入学して半年となる春学期の出席回数を確認し、教学センターの修学支援担当職員が保護者と本人に通知を出し、必要に応じて面談や電話での相談を行っている。場合によっては学内の学生相談室と連携することもある。
4	各学部で展開する初年次教育科目	【学部適応・専門分野への動機付け】本学では全ての学部がなんらかの初年次教育プログラムを展開している(一部科目として展開していないものもある)。例えば、理学部では入学前に丸2日間の学部適応を高める為の教育プログラムを実施しており、入学式時点で学内に本音で話せる友人がいる状態であり、スムーズに学部の教育プログラムに入る事ができるよう配慮している。法学部では、「プレップセミナー(必修科目)」で、初年次学生がグループワーク、ディスカッション等を中心した学習活動を通し、専門科目への興味を広げ、無理なく高大接続を行う為の仕組みが整備されている。このような初年次学生の取組は、各学部の初年次学生へのヒアリングや、教員の問題意識に対応する形で、各学部設置され、毎年洗練されている。
5	各学部で展開する修学支援	【学部修学支援・専門分野への動機付け】入学時に限らず、専門教育における知識の不足や技術の不足について、各学部ではフォローアップの取組を展開している。例えば、コンピュータ理工学部では、「寺子屋」という施策を実施している。これは、授業やプログラミングについて、分からないことがあれば、先輩学生や教員に質問し、個別対応を受ける事ができるシステムである。コンピュータ理工学部の「玄関」である。14 号館の入り口に、シースルーの壁で区切られて設置されたコミュニケーションスペースにて展開している。

3-2. コース学生の選抜について・高大接続について(堀江委員)

理系でも英語力の優れた、さらにまたモチベーションの高い学生、それを重点的に入学させる方法
というのも、あの検討すべきじゃないかなというのと、あと高校からの継続性の重視というのも、お考

えになっていただきたいなということ(後略)。

【本学からの返答】

グローバル・サイエンス・コースの選抜は、・・・となっています。また、各学部では AO 入試によって、学力や英語力だけでなく、チャレンジ精神の高い学生や、計画実現力の高い学生の選抜に取り組んでいます。例えば、コンピュータ理工学部の AO 入試では、高校生時点で挑戦的なプログラムを作成した学生が、そのプログラムの PR を行い、それをコンピュータ理工学部教員が審査するという方法で学生選抜を行っています。

高大接続については、入学前教育を各学部で展開すると共に、英語の eLearning 教材の学習をどの学部を志望している学生にも展開しています。さらに、高校からの接続性の重視という意味では、附属高校と高大連携の教育プログラムを開発・実施しています。

今後も、このような取組を洗練すると共に、継続的に実施して行きたいと考えております。これらの成果については、今年度の報告書では説明が不十分でしたので、来年度の報告書にて、ご報告できればと考えております。

3-3. 入学前教育の e-learning について(堀江委員)

授業が始まる前からの e-learning もされているようですが、それをもっと進められたらいいんじゃないかな

【本学からの返答】

有り難うございます。入学前教育の充実については、常から話題に上がっている項目の一つであり、引き続き議論していきたいと考えています。グローバル・サイエンス・コース学生向けに導入した e-learning システムについては、モチベーションの高い一部の学生のセルフラーニングだけに頼らないよう、勉強会等を設定し、共に学ぶ学生同士のコミュニティを形成し、互いにモチベーションを高め合う関係ができるよう配慮しています。入学前学生にも、現状の e-learning システムの提供範囲を順次拡大していきたいと考えています。

4. 教養教育に関する改善点

4-1. 日本語教育への取組を行う(穂屋下委員)

要するに勉強しないと授業が受けられないような体制とかですね。なんかあるんじゃないかと思うんですけども。そういう努力をされているのかな(中略)。要するに英語ができるだけじゃなくて基本、基礎科目ですね。例えば日本語科目、基礎科目だと思うんですね、国語ですね。この国語ができないから、実は考えをまとめることができないので、極端にいうと、英語もできない。英語の前に日本語が、誰か仰っていたと思うんですけど。その辺に対してですね、どのような対策を取られているのかな(中略)。ラーニングコモンズは基本的に、これに関係していると思いますが、非常にいい取組だと思

います。

【本学からの返答】

日本語教育に関しては、本学では、教養科目として、「日本語表現」という科目群を設定しています。このライティング科目による日本語教育と、お褒め頂きました雄飛館ラーニングコモンズで展開しております日本語のライティング支援サービスを連携させた取組も現在考案中です。既に、初年次学生の半数以上が受講する大規模初年次共通教育科目である「自己発見と大学生活」では、自身のキャリア観について内省を促すためのレポート課題を、学期中に三本、テーマを変えながら記述することに取り組んでおります。この時、平成 26 年度は、試験的に雄飛館ラーニングコモンズのライティング支援サービスを受けるよう推奨し、(人員の問題もあり、それほど熱心に学内広報出来てはいないものの)利用者が集まっており、場合によっては、予約をレポート課題締切までに取りることができず、サービスを受ける事を断念する学生が出るような状況となりました。また、これらの成果について、事業報告書で進捗をお知らせできればと考えます。また、「日本語表現」や「自己発見と大学生活」は教養科目なのですが、各学部では、初年次教育プログラムをそれぞれ整備しており、その中には日本語教育を専門知識と結びつけながら取り入れている場合もあります。

このような日本語教育に力を入れると共に、本学も図書館ホールにラーニングコモンズ・プロトタイプ版、雄飛館ラーニングコモンズと学習環境の整備を進め、今後グローバル・ビレッジ(仮称)の設置も検討しており、学生達がキャンパス滞在時間を学習に活用できるように今後も邁進する予定です。

4-2. ラーニングコモンズの取組に社会人を巻き込む(堀江委員)

LCの中に日本人と外国人の社会人を取り込むようにしていったら、学生は非常に刺激を受けるのではないかと、いう気がするので、それもぜひ検討していただけたら(後略)。

【本学からの返答】

有り難うございます。外国人の社会人との交流というと、平成 25 年度 3 月に実施した、構想調書時点でも書きましたように、ラーニングコモンズでは、地域の社会人等を巻き込んだ学習活動や学習意欲を喚起するイベントの実施を予定しております。実際に、紀伊國屋書店で働く若手の女性社員の方に身近な本について紹介頂き、ディスカッションするイベントの実施等が行われ、学生と交流して頂きました。

5. SD に関する改善点

5-1. 専門職的な人材と既存の終身雇用職員との能力向上が呼応する仕組みづくり(上杉委員)

終身雇用の他の職員が置いてきぼりになってしまって、従来のままということになりかねない。やっ

ぱり中心になる専門職的な人と職員全体が、能力向上が呼応して、一緒になって仕事をして、レベルアップしてもらとう。そういう工夫をすることによって、弱点が克服できると考える。

【本学からの返答】

本学では、終身雇用の専任職員と、専門職員である嘱託職員とが、同じ職場で机を並べ仕事をしています。これは、職場そのものがSD(職員の能力向上)の場として機能することを期待して配置したものです。専任職員と嘱託職員が、互いの得意とする場面で、互いにイニシアティブを取りながら仕事を一緒にする環境を実現しております。また、机を並べるまでには至りませんが、本学では教職協働も重視しており、特に作業部会レベルの会議では、教員と職員とが対等な関係性で、時に付箋や模造紙、ホワイトボードを使用し、活発に議論に参加しています。今後も、このような協働を引き続き重視して行きたく存じます。

5-2. 専門職的な人材と既存の終身雇用職員との能力向上が呼応する仕組みづくり(上杉委員)

グローバルということが語学だけじゃない、むしろ日頃の仕事をする姿勢とか態度とか、グローバルな関心を持つ視野を広げる努力とか、あるいは毎年毎年業務を改善して、より良くしていくという姿勢、そういうことが基本的な裏打ちになっていくのだろうというふうに思います。そういった要素もこのグローバルの人材育成の事業の中で、方向づけをしていただければいいかなというふうに思います。

第三の職に相当する人というのは、外にいる人に来てもらって大学の仕事に慣れてもらう面と、中の職員でそういう力のありそうな人をうまく育て、そういう専門職的な人になってもらうという面と、さらに教員の方々の中でそういう力のある方に一緒にやってもらう。

専門的な有能な人材となる可能性を秘めた職員の層、グループ、人材の厚みがあるという姿を作れば、継続性のある状態になっていくという風に思っています。これは、グローバル担当というだけでなく、たとえば研究では(ユニバーシティ)リサーチ・アドミニストレーター(URA)とされている方々もそうですし、そのモデルができれば他の分野、他の大学院に波及するという可能性をというふうに思いました。

【本学からの返答】

本学では、専門性の高い職員を嘱託職員(有期雇用)で大学改革に導入するという施策に、ここ数年力を入れてきました。既存の専任職員(終身雇用)とは、同じ職場で働き、同じプロジェクトの中で役割分担をしながら作業をしています。このように、同じ職場に専門性の高い人材と、本学文化を深く理解した人材とが、混在する場があるということ自体が、SDの一貫であると考えております。

また、大学改革に対する能力を有する教員については、本事業は勿論、学内の様々な委員会、ワーキンググループにて、活躍されている教員がおり、それらのプロジェクトは基本的に教職協働で行

っておりますので、それぞれ関連学会での発表などにも、教員と職員とで取り組んでおります。本事業の場合ですと、関西地区 FD 連絡協議会や大学コンソーシアム京都主催の FD フォーラムなどでの発表が該当します。

まだまだ大学改革に必要な専門性を持っているとはいえない状況が続いておりますので、今後も学内の議論に必要な人材を求めつつ、互いに高め合うような場の設定、人材育成施策に努めたいと思います。

5-3.「職員の語学力向上における実態把握のためのアンケート調査」の継続について(上杉委員)

語学力の向上については先ほどの説明のように全職員の語学力の実態を把握して、それに応じた取り組みをするというのはとても優れた点でありますし、この能力の把握は、定期的に良くなっていく、この事業を行うとともに職員の力がどういうふうに変化していったか、なぜ変化したか、こういった点を明らかにしていっていただければ、参考になるものが得られるというふうに思います。

【本学からの返答】

そのように評価して頂けて、嬉しく存じます。今後も、機をみながら、継続して実施する予定です。

5-4.「グローバル人材育成プログラム(SD)のコンセプト」の洗練について(上杉委員)

グローバル人材育成プログラムのコンセプトということで、主に研修事業に着目した体系の図があって、そういう風に体系的に描いてもらおうと書いてもらおうとわかりやすくていいと思うんですが、それが主に研修について書いた図ですので、もっこの図を広げて、どういう仕事をするにはどういうレベルの語学力が必要なのか、というその行うべき業務とそれからそこで必要とされるスキル、それがわかるようにすると、そしてこういった業務を実行可能になるためには、こういった業務経験をし、こういった研修をすることで、行けばたどり着くことができるということが職員自身に見えるようにする、見える化をするということが今後必要ではないかとふうに思います。

【本学からの返答】

お言葉有り難うございます。概念図については、事務グローバル化プロジェクトチームにて、ギロシ、まとめたものですので、お言葉大変嬉しく思います。お言葉の通り、見える化は非常に大事な要素と考えております。今後の取組としては、職員のルーブリックを、まずは国際交流に関する職域から徐々に行い、大学職員の職能の棚卸しや、レベルの整理などを、ステップバイステップで、知見を貯めながら、実態に即した意義深いものを目指して構築する予定です。実務との関係性を拙速に整理するのではなく、既存の制度とうまく整合し、機能するものを作り上げるという、泥臭い作業となりますが、今後も進めていきたいと存じます。

6. 留学プログラムに関する改善点

6-1. 日本語教育への取組を行う(穂屋下委員)

アジアにシフトしつつ、英語に力を入れるということが今後の方向性かなという気がします。

【本学からの返答】

はい、お言葉の通り、構想調書執筆当初の予定通り、引き続き、理系・アジア圏の留学に力を入れて計画を進める所存です。現状のところ、本報告書のように、文系・アジア圏のみ海外インターン先を確保できず、海外サイエンスキャンプも、理系・アメリカとなってしまうております。一方、アジア圏での留学先というのも韓国、中国含めて、英語研修の派遣先としておりますのが、本学の特徴となります。成果は成果として受け止めながらも、ベトナム・ハノイ等の研修開発も引き続き行っておりますので、今後も、この取組について継続してご報告の予定です。引き続き、宜しくご指導の程、お願い致します。

以上